

史跡賀茂別雷神社境内

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡賀茂別雷神社境内

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかむかしの、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、収蔵庫新築工事に伴う史跡賀茂別雷神社境内遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

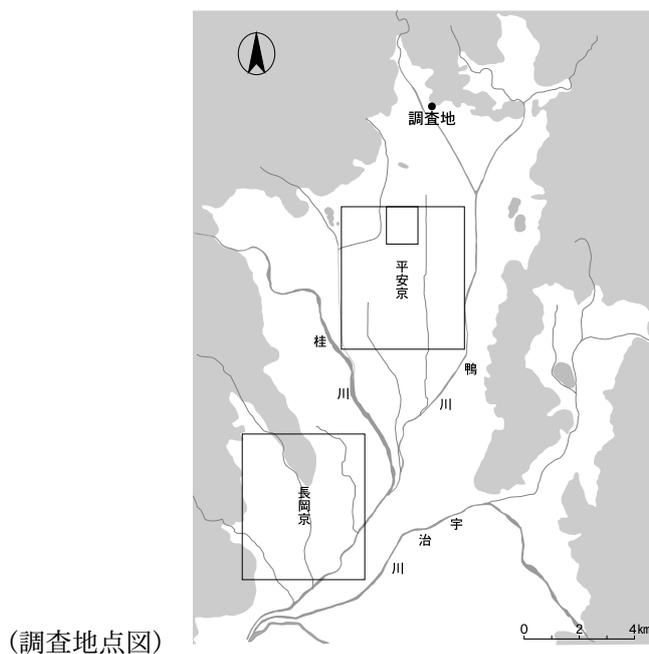
平成 23 年 8 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡賀茂別雷神社境内
- 2 調査所在地 京都市北区上賀茂本山 339
- 3 委 託 者 賀茂別雷神社 代表役員 田中 安比呂
- 4 調査期間 2011年5月18日～2011年5月31日
- 5 調査面積 1区約23㎡、2区約37㎡
- 6 調査担当者 近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西賀茂」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 歴史	3
(2) 遺跡の位置と周辺調査	5
3. 遺 構	7
(1) 1区	7
(2) 2区	7
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
(3) 瓦類	12
(4) その他の遺物	12
5. ま と め	13
6. 付章 1989年試掘調査	14
(1) 経過	14
(2) 遺構・遺物	14

図 版 目 次

図版1	遺構	1	2区全景（北から）
		2	1区全景（南西から）
		3	2区石検出状況（北から）
図版2	遺構	1	1区南壁断面（北西から）
		2	2区東壁断割り断面（西から）
図版3	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査前全景（西から）	1
図2	調査風景（南から）	1
図3	遺構面の保護状況（南から）	1
図4	調査区埋戻し状況（南西から）	1
図5	調査位置図（1：5,000）	2
図6	調査区配置図（1：400）	4
図7	1区南壁断面図（1：50）	7
図8	2区断面図（1：80）	8
図9	調査区平面図（1：100）	9
図10	2区石検出状況平面図（1：50）	10
図11	土器実測図（1：4）	11
図12	軒瓦拓影・実測図（1：4）	12
図13	1989年試掘調査 遺構実測図（1：100）	14
図14	1989年試掘調査 調査区全景（北から）	15

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	11

史跡賀茂別雷神社境内

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、史跡賀茂別雷神社境内である。賀茂別雷神社（通称「上賀茂神社」）境内において、参集殿の西側に参集殿控室兼古文書収蔵庫の新設工事が計画された。建物基礎が地下遺構を保全できる設計を行うために、遺構面の確認および深さなどの基礎資料を得る目的で発掘調査を行うこととなった。委託者である神社関係者、建築業者、京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文化財保護課」という。）、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）、京都市埋蔵文化財研究所による協議を行い、調査の方針を決定した。

(2) 調査の経過

調査区は当初、東西トレンチ幅3m・長さ22.75m、南北トレンチ幅3m・長さ11.75mのL字状に設定する予定であったが、埋設管や樹木を回避した結果、1区は幅3m、東西長約7.5m、



図1 調査前全景（西から）



図2 調査風景（南から）



図3 遺構面の保護状況（南から）



図4 調査区埋戻し状況（南西から）

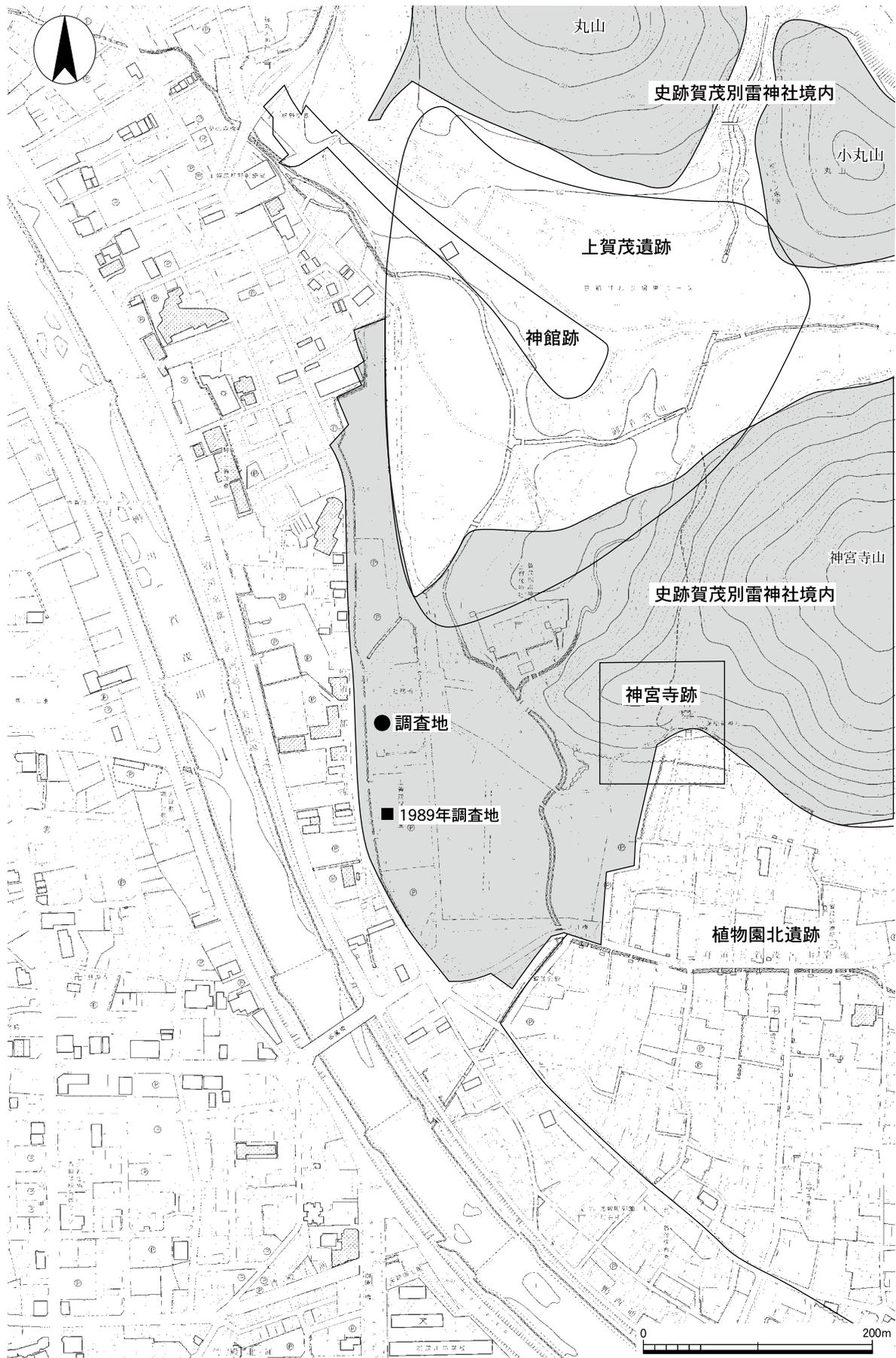


図5 調査位置図 (1 : 5,000)

2区は幅3m、南北長西端約10m・東端約14mの不定形な調査区を設定した。

調査は、まずアスファルトを機械により切断し、残土と分別するため敷地内に仮置きした後、現代層を重機により掘削した。その際、1区の東西両端で埋設管が発見されたため、土嚢で保護した。その後、遺構面まで人力により精査し、写真撮影・遺構実測を実施した。

調査の結果、遺物を包含する整地層を検出したため、府文化財保護課・市文化財保護課の視察・指導を受け、掘削は整地層上面までに留めたが、一部、遺構面の下層確認のため、断割り調査を行った。5月30日に遺構面の保護として10cm厚の砂を入れ、その後、残土で埋戻しを行った。

2. 遺 跡

(1) 歴史

賀茂別雷神社は、賀茂別雷命を祭神として祀る。

創建については、『山城国風土記』（逸文）の伝承によると、賀茂建角身命は「神武東征」の際に難路を先導した八咫鳥の化身とされる。大和国の葛木山の抛地から南山城（木津川市加茂町）を経てさらに木津川を北上し、賀茂川上流に至り、久我の国の北山基に鎮座した。鴨川を挟んで西にある北区紫竹竹殿町の久我神社が、旧社であるとも考えられている。賀茂建角身命は、丹波国の神野（兵庫県丹波市氷上町御油の神野神社）の伊可古夜日売をめとり、玉依日子と玉依日売の男女をもうけた。玉依日売は石川の瀬見の小川で川遊びをしているとき、流れてきた丹塗矢を取ったのち、孕み、男子を産んだ。その子の成人の祝いの席で、外祖父の賀茂建角身命の言葉により、父が雷神であると示し、天に昇った。そのため賀茂別雷命と名付けられた。賀茂別雷命の母である玉依日売と祖父の賀茂建角身命を祭神とするのが、賀茂御祖神社（通称「下鴨神社」）で、これらの神社は、賀茂県主一族によって祀られたとされる。

賀茂御祖神社は、当初は賀茂別雷神社の摂社の一つであった。賀茂別雷神社を上賀茂社、賀茂御祖神社を下鴨社、または上社・下社と称される。天応元年（781）には把笏が両社に許可され、「賀茂社」として対等の待遇を受けることとなった。それ以降、上・下二社と記述されるようになる。

「賀茂社」についての信頼できる最も古い記述は、『続日本紀』文武天皇2年（698）3月21日条で「山背国賀茂の祭の日、衆を会め騎射するを禁ず」である。「賀茂の祭の日に人々が集まり、騎射することを禁じる」というものである。

延暦3年（784）には、長岡京遷都に伴い従二位の神位が与えられる（続日本紀）。延暦12年（793）の平安京遷都前年には、桓武天皇が遷都の報告を行い、遷都後には天皇が行幸している。さらに大同2年（807）5月3日には伊勢神宮に次ぐ正一位が与えられた（日本紀略）。平安京遷都により、地方豪族の氏神から平安京第一の王城鎮護の神として祀られることとなった。また賀茂祭も大同元年（806）には勅祭となり、賀茂県主の一族の女から神を迎える巫女を選出していたのを、弘仁元年（810）には皇室から未婚の内親王を斎王とすることが確立し、初代斎王として嵯峨天

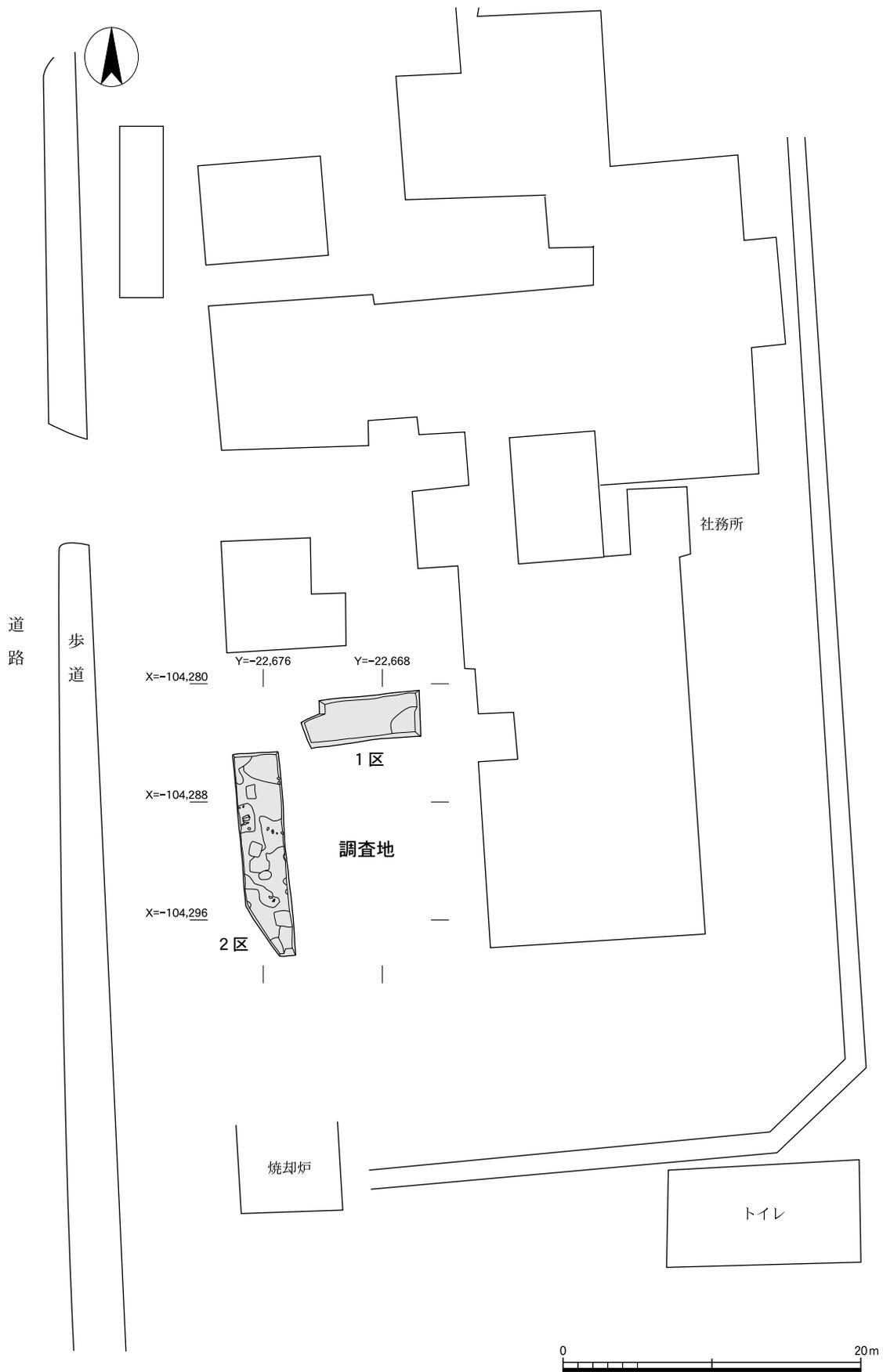


図6 調査区配置図 (1 : 400)

皇の皇女有智子内親王が務めた。建暦2年(1212)、後鳥羽上皇の皇女礼子内親王が病気のため退下し、承久の乱(1221)以後、廃止されたが、その間約400年、35代の齋王が内親王から選出された。

鎌倉幕府が確立する以前から、源頼朝による庇護と信仰を得ており、各地に広がる賀茂社の社領は、頼朝の勅旨により守られた。その後、承久の乱では後鳥羽上皇に協力し参戦する。

室町時代の建武3年(1336)には、足利尊氏の軍勢の乱入により放火され、本殿その他を焼失する。文明8年(1476)には神社内紛により、合戦・放火があり、本殿や諸社寺および境内周辺までが焼亡する。

近世になり天正19年(1591)には、豊臣秀吉により遷宮が行われている。慶長5年(1600)、徳川家康が賀茂社に参詣し、同15年(1610)に家康に葵を献上したことから、それ以降毎年、江戸城に献上することが習わしとされた。寛永5年(1628)、徳川秀忠により造替され、本殿・権殿は文久3年(1863)に造替される。

近年では昭和20年(1945)のGHQ指令により、国家支援が廃止される。同28年(1953)には本殿・権殿が国宝に、36棟が重要文化財に指定される。また賀茂祭が復活し、同31年(1956)には齋王代を中心とする女人行列が復活する。

境内は平成5年(1993)に史跡指定、同6年(1994)には世界文化遺産に登録される。

[参考文献]

- 大山喬平監修『上賀茂のもり・やしろ・まつり』思文閣出版 2006年
京都市編『史料京都の歴史 第1巻概説』平凡社 1993年
京都市編『史料京都の歴史 第6巻北区』平凡社 1993年
山路興造「第二章 集落と神社」『平安京提要』角川書店 1995年

(2) 遺跡の位置と周辺調査

賀茂別雷神社は京都盆地の北部にあたり、鴨川左岸に広がる扇状地の北西部、ご神体とする神山の南麓に位置する。西側は古来より鞍馬と洛中をつなぐ鞍馬街道に接する。史跡の範囲は、神宮寺山のみならず、北は丸山・小丸山、さらに北方の神山まで飛地状に展開する。

境内の北方に広がる本山国有林は、第二次世界大戦後、進駐軍の娯楽施設としてゴルフ場が作られ、現在も民間のゴルフ場として営業している。場内にある小池は、境内に流れる明神川の源流の一つである。また、本山は1965年にその一部が京都産業大学の構内となっている。ここには上賀茂遺跡があり、ここからは縄文土器、石器などが出土しており、縄文時代後期の集落遺跡と推定されている。さらに古墳時代の土器類も出土している¹⁾。

南接して南東に広がる地域には、遺跡範囲面積が約140万㎡に及ぶ植物園北遺跡がある。この遺跡は弥生時代後期から古墳時代を中心とした、大集落遺跡である。遺跡の範囲は賀茂上社・下社の間にあることから、賀茂一族との関連が考えられている。また、縄文時代中期から晩期の遺構・

遺物も発見されている。

境内南東部には神宮寺跡がある。明治初年の廃仏毀釈により廃絶したが、基壇と礎石3個が残存している。『続日本後紀』天長10年(833)によると「賀茂社東一許里に、神戸百姓が賀茂大神のために岡本堂を建立した」という記述があり、また弘仁11年(820)には賀茂社の禰宜男牀が神託により聖神寺を建てたという記述があり、平安時代に建立されたと考えられる。付近からは、故木村捷三郎氏により平安時代後期の瓦が収集されている²⁾。

境内の調査としては、史跡指定以前の平成元年(1989)社務所南側の駐車場内において、試掘調査を実施しているのみである。調査の詳細については、「6. 付章」で記述する。

境内南側の道路では、ガス埋設管・電線共同溝などの工事に伴う立会調査が行われている。調査では平安時代中期から後期の包含層を確認している。また、各調査地点で氾濫堆積と思われる砂礫層を確認している³⁾。

註

- 1) 京都市編『京都の歴史 第一巻 平安の新京』學藝書林 1970年
- 2) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年

3. 遺 構

調査区は、1区（東西方向）、2区（南北方向）を樹木や埋設管を回避してL字状に設定した。調査では、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代の2時期の整地層を確認した。いずれも層の上面では明確な遺構は確認できなかった。

(1) 1区

基本層序は、地表下0.9mまで現代盛土、以下、10YR4/4褐色・3/4暗褐色砂礫の無遺物の氾濫堆積層である。西端では、地表下0.6mで10YR3/4暗褐色～4/4褐色、7/2～7/3にぶい黄橙色砂質土層の室町時代の整地層1、0.75mで10YR4/4褐色・3/4暗褐色砂質土層の平安時代末期から鎌倉時代の整地層2である。

調査区の大部分は、現代攪乱により整地層が削平されており、また、東端は樹根による攪拌が著しく、西端のみで整地層を確認した。2区との間は、埋設管や樹根により削平、または攪拌されているため、未確認である。

(2) 2区

基本層序は、地表下0.6mまで現代盛土、以下、1区と同様の整地層1が2層堆積し、0.95m以下、同様の砂礫層である。

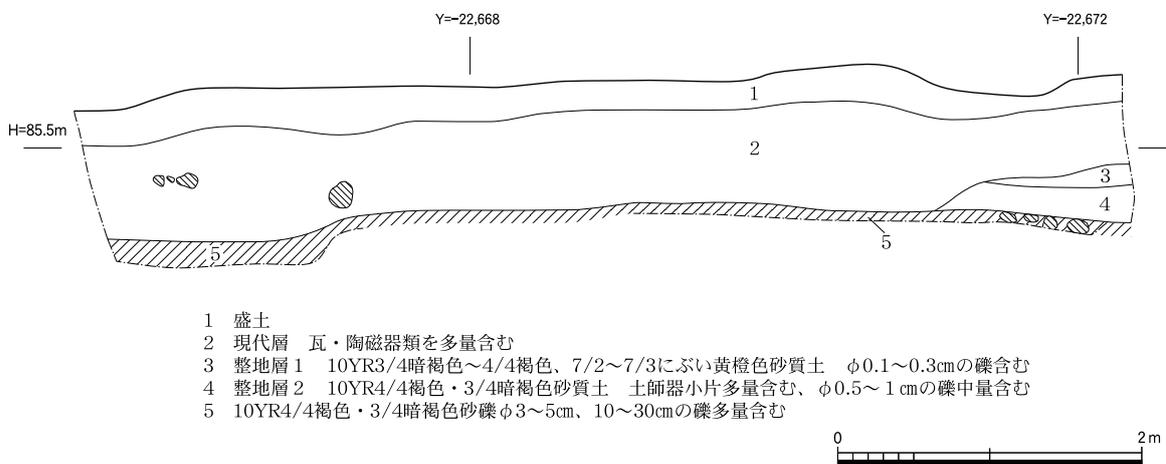


図7 1区南壁断面図（1：50）

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代末期～鎌倉時代	整地層2	
室町時代	整地層1	

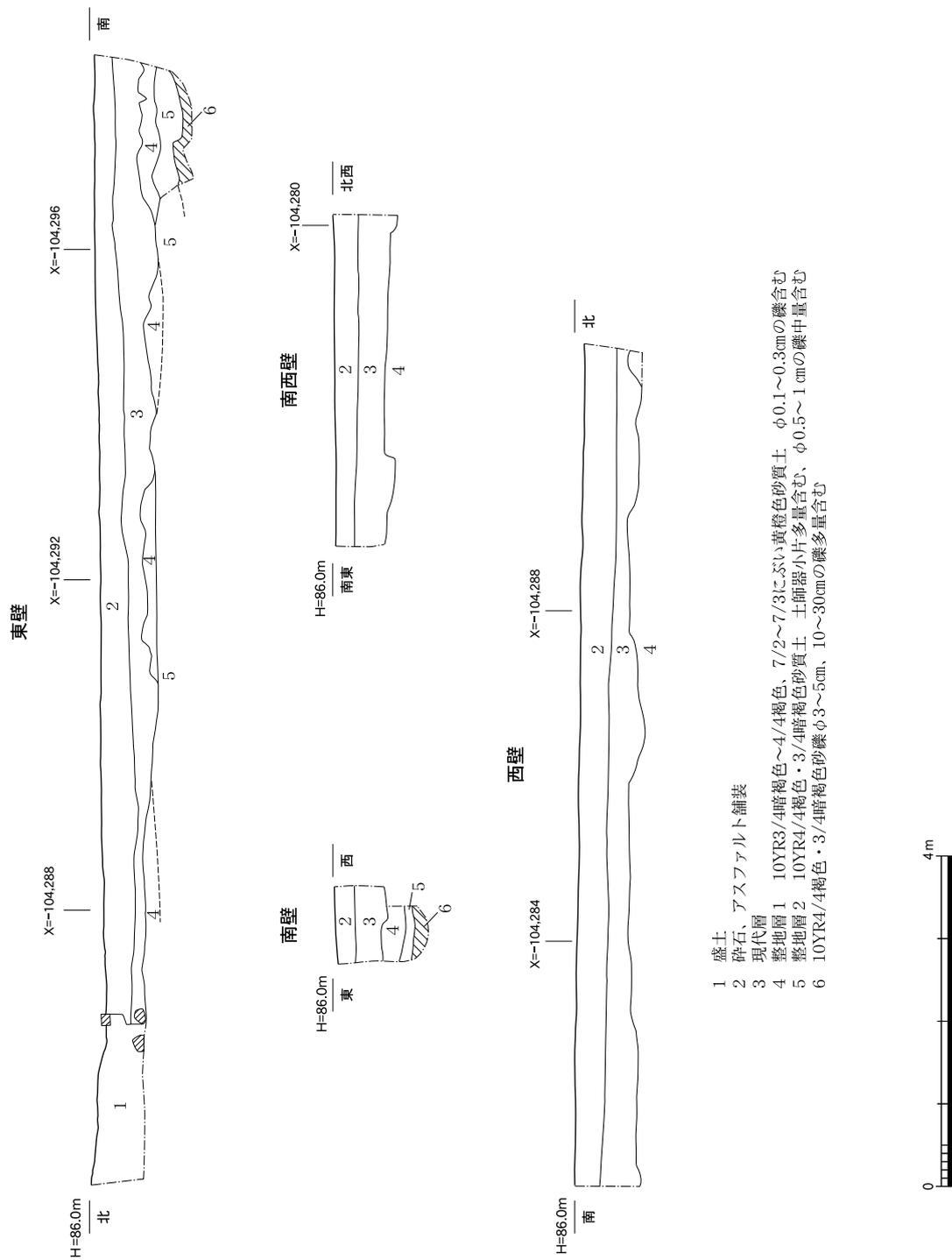


図 8 2区断面図 (1 : 80)

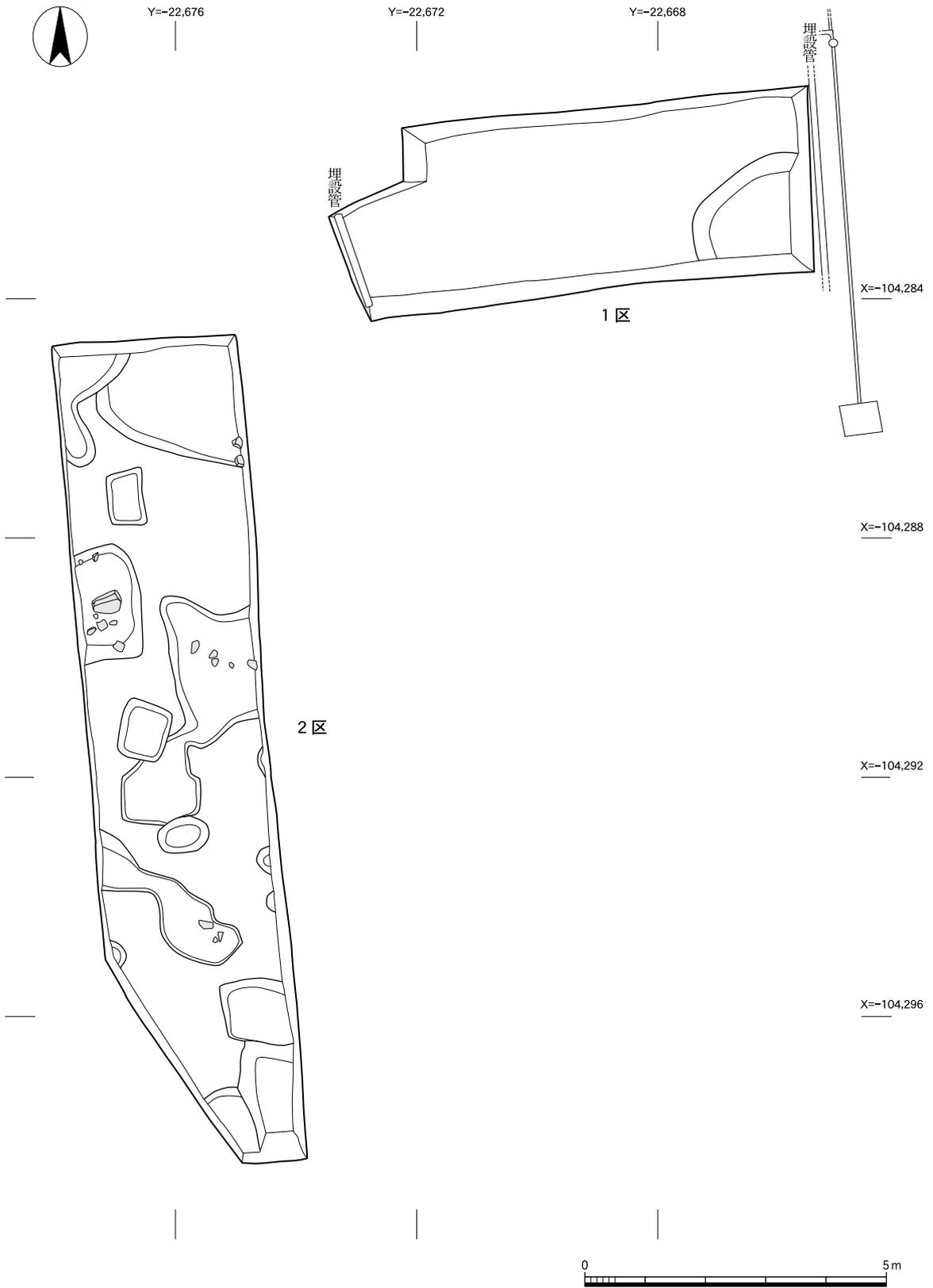


図9 調査区平面図 (1 : 100)

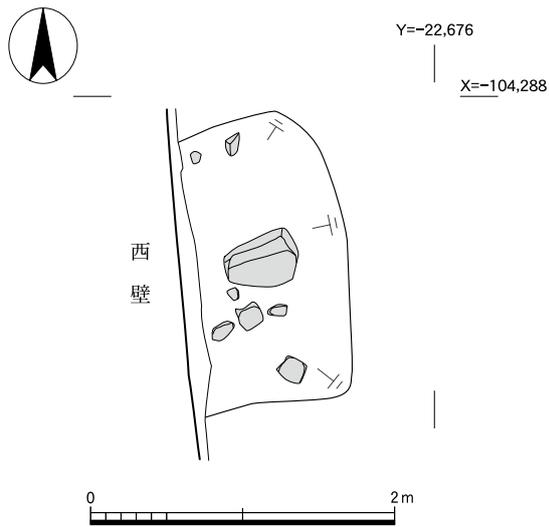


図10 2区石検出状況平面図(1:50)

整地層1は、現代攪乱により大半が削平され、断割り箇所を確認した結果、層厚は約0.3m残存し、室町時代の土師器皿小片をわずかに含んでいる。

整地層2は、層厚0.1～0.4mで、土師器片を多数含み、小片であるが平安時代末期から鎌倉時代の土師器皿が数点出土した。

整地層2で石を数個検出したが、掘形などは確認できなかったため、遺構に伴うものかは不明である。

なお、整地層下の砂礫層上面の標高は、当該地は85.0m、1989年調査地は84.4mで、北から南へ下がる地形である。ちなみに西側道路の標高は85.3mである。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に1箱出土した。出土遺物には土器類・瓦類・金属製品などがある。出土遺物のほとんどは土器類である。

平安時代末期から鎌倉時代の遺物は、整地層2から出土している。1点であるが土師器台付皿の高台部分と思われる小片が出土している。また、底部のみであるが、糸切り痕の残存する土師器皿が出土している。室町時代の遺物は、整地層1から土師器皿が出土した。近世から近代の遺物には、陶磁器類の染付・施釉陶器がある。

瓦は、近世以降の軒丸瓦、菊丸瓦が出土した。

金属製品は、釘・金具・火舎の脚部などがある。

(2) 土器類 (図11、図版3)

ほとんどが土師器皿小片で、瓦質土器・施釉陶器・染付がごく少量ある。土師器は時期が確定できるものを抽出して、図化した。

平安時代末期から鎌倉時代(1~6) 1は復元口径9.2cm・器高1.7cm、2は復元口径9.6cm・器高2.1cmである。調整は口縁部内外面をヨコナデ、底部はオサエによる。3は復元口径8.2cm・器高1.1cmである。口縁端部を短く内側に折り曲げる。調整はナデによる。4・5は口縁部内外面をヨコナデ調整する。断面のみ図化した。す

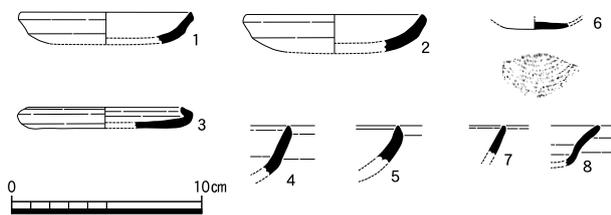


図11 土器実測図(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代 ~鎌倉時代	土師器、瓦		土師器6点、軒平瓦1点		
室町時代	土師器		土師器2点		
江戸時代	土師器、瓦		軒丸瓦1点、菊丸瓦1点		
近代以降	磁器、施釉陶器、金蔵製品		施釉陶器1点、金属製品1点		
合計		2箱	13点(1箱)	1箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

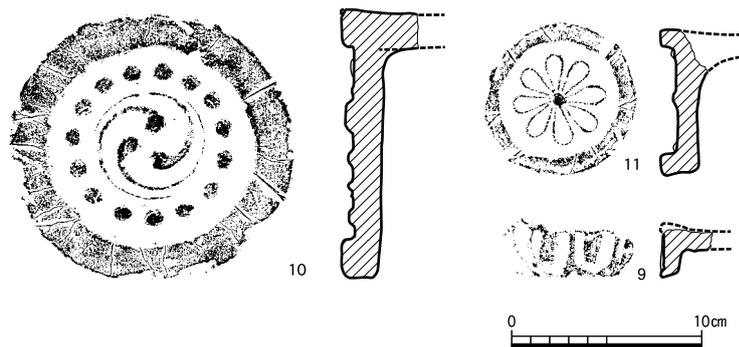


図 12 軒瓦拓影・実測図（1：4）

べて整地層 2 より出土する。6 は底部のみであるが、内面は回転ナデ、外面に糸切り痕が残る。1 区北壁精査中に出土。

室町時代（7・8） 7 は白色系・8 は赤色系の土師器小型皿の口縁部である。口縁部は外反気味に立ち上がる。調整は内外面をナデ、8 の底部外面はオサ

エによる。8 は底部中央を強く押し上げる形態である可能性がある。断面のみを図化した。整地層 1 より出土する。

近代以降（12） 12 は施釉陶器碗である。器表面に「○賀○社」の文字が染め付けされている。京焼きである。現代攪乱に混入していたもので、時期は不明である。写真のみ掲載する。

（3）瓦類（図 12、図版 3）

剣頭文軒平瓦（9） 瓦当部成形は折り曲げ技法。調整は瓦当部裏面はオサエ。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色。焼成はやや軟質。平安時代後期。

三巴文軒丸瓦（10） 右巻き三巴文で、頭部は離れ、尾部は互いに接しない。外区に密に珠文を配する。瓦当部側面上半タテナデ、下半ヨコナデ。胎土は砂粒を含む。色調は灰白色。焼成は硬質。近世以降。

菊丸瓦（11） 単弁の菊文を配する。花卉は 8 弁である。調整は瓦当部側面はタテナデ、裏面ナデである。胎土は砂粒を含む。色調は灰白色。焼成は硬質。江戸時代。

（4）その他の遺物（図版 3）

13 は火舎の脚部と思われる。青銅製で獅子の頭部と足を模している。獅子の髪・髭等は彫金による。足の裏側には金属による留め具が付着しており、おそらく台座に固定したものであろう。重量約 430 g、高さ 17 cm、頭部最大幅 9.5 cm。現代攪乱に混入していたもので、時期は不明である。写真のみ掲載する。

5. ま と め

上賀茂神社は、1993年に国の史跡に指定され、1994年には世界遺産に登録された。指定される前の1989年に耐震性貯水槽設置に伴う試掘調査が行われ、地表下約1.2mで中世の遺物包含層を検出しており、平安時代末期から室町時代にかけての土師器・瓦類が出土している。そして地表下1.3～2.0mまで賀茂川の氾濫堆積である砂礫層を確認している。この調査地は当該地の南約100mに位置しており、検出した中世の包含層は、今回検出した整地層と出土遺物の年代からみて、同様のものと思われ、この地域一帯に広範囲に整地がなされた可能性がある。

室町時代に描かれた「賀茂別雷神社絵図」（賀茂別雷神社所有）には、境内西端中央付近に多宝塔が描かれている。また『百練抄』には、平安時代末期に鳥羽天皇により多宝塔が建立されたことが記述されていることから、この多宝塔がその時のものであると考えられる。

今回の調査箇所は、上述の多宝塔付近とも想定されたが、調査面積が狭小であったことや、室町時代の整地層を保護するため、下層確認のための掘削を最小限に留めたため、関連する遺構は検出されなかった。しかし、平安時代末期から室町時代の間、広範囲に整地がなされたことは、境内に何らかの建物があった可能性があり、今後この整地層には注意が必要である。

6. 付章 1989年試掘調査

(1) 経過

調査は、耐震性貯水槽設置に伴うものである。8 m×8 mの方形の調査区を設定した。調査は盛土・旧表土・近世包含層・中世包含層を順次重機ではぎ、灰褐色砂礫層上面で遺構検出を行った。また、調査区西側では砂礫層の性格などを確認するため、さらに地表下2.0 mまで、重機により掘削を行った。

(2) 遺構・遺物

基本層序は、地表下0.7 mまでアスファルト・碎石・盛土である。以下、旧表土、近世包含層、

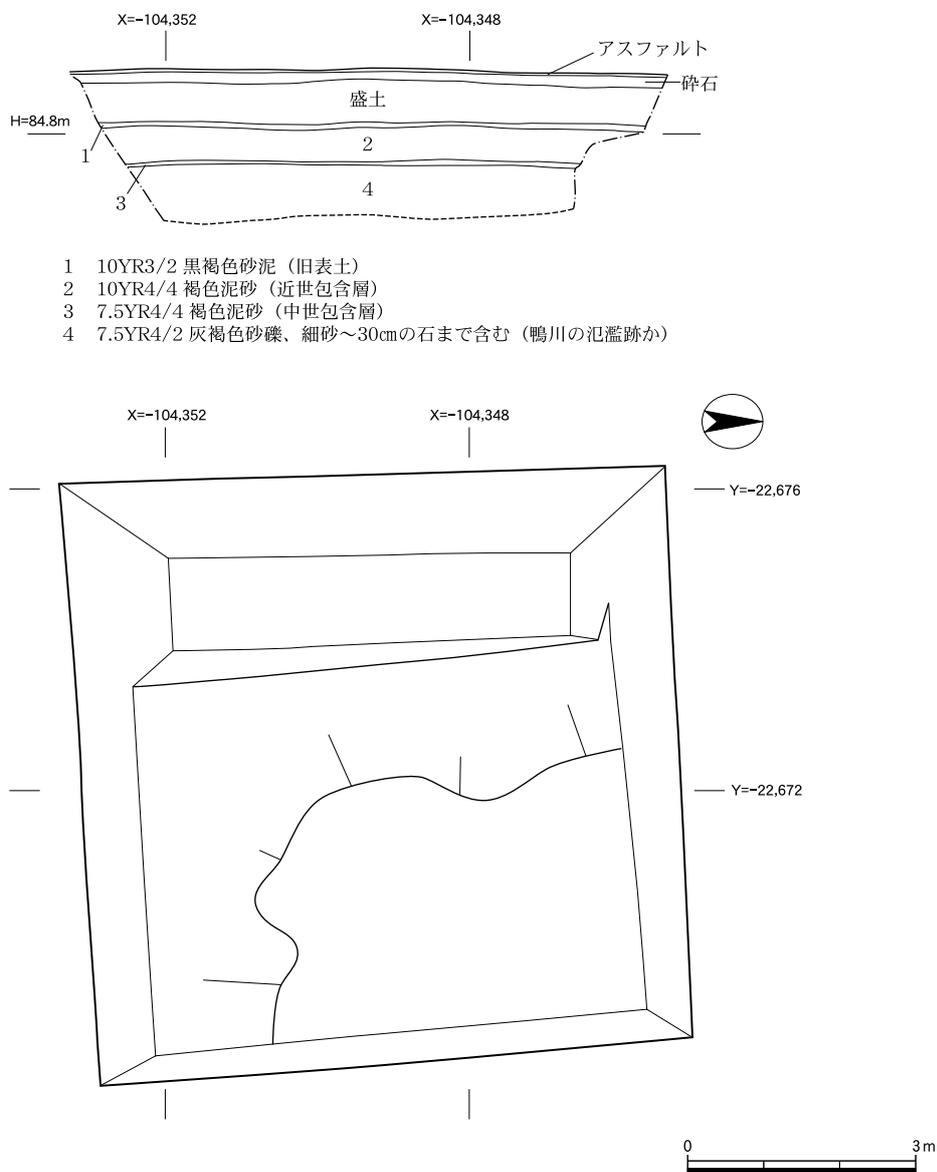


図13 1989年試掘調査 遺構実測図 (1:100)

中世包含層となる。地表下 1.1 m で鴨川の氾濫堆積と思われる砂礫層となる。砂礫層は南西方向に向かって徐々に低く傾斜していく。また、砂礫層の高低によって中世包含層の層厚も変わり、砂礫層の低い部分では包含層は厚く堆積する。砂礫層は地表下 2.0 m まで確認した。

砂礫層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。

遺物の出土量は少なく、整理箱に 1 箱である。そのほとんどは中世包含層から出土した。内容は土師器皿と瓦である。土師器皿はほとんどが小片であるが、口縁部の特徴から平安時代末期から室町時代のものと考えられる。瓦は平瓦、巴文軒丸瓦、鬼瓦と思われる破片が出土した。



図 14 1989 年試掘調査 調査区全景（北から）

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかもわけいかづちじんじゃけいだい							
書名	史跡賀茂別雷神社境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-1							
編著者名	近藤章子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきかもわけいかづち 史跡賀茂別雷 じんじゃけいだい 神社境内	きょうとしきたく 京都市北区 かみがももとやま 上賀茂本山339	26100	A112	35度 03分 35秒	135度 45分 05秒	2011年5月 18日～2011 年5月31日	60m ²	収蔵庫 新設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡賀茂別雷神社境内	都城跡	平安時代末期 ～鎌倉時代	整地層	土師器、瓦				
		室町時代	整地層	土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-1
史跡賀茂別雷神社境内

発行日 2011年8月31日

編集

発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961